『論叢』玉川大学文学部紀要　第55号　2014年，pp. 105～129

論説

レオナルド・ネルゾンと〈理性の自己信頼〉（1）
―レオナルド・ネルゾンとは―

太田　明

要　約

この研究は20世紀前半にドイツのゲッチンゲン大学を中心に活動した哲学者哲学者レオナルド・ネルゾン（Leonard Nelson, 1882–1927）について，その生涯を視野に入れて，人となりを知ることを目的とする。ネルゾンはソクラテス的対話の提唱者としては著名であるが，その哲学と政治的活動，教育活動に関してはすでに忘れ去られている。そこには外在的理由も内在的理由もあるはずである。ネルゾンに関する伝記的文献を渉猟し，ネルゾンの事跡を負うことによって，その忘却の外在的理由を探る。

キーワード：レオナルド・ネルゾン，理性の自己信頼，ソクラテス的対話

はじめに

20世紀前半，ゲッチンゲン大学で活動した哲学者レオナルド・ネルゾン（Leonard Nelson, 1882–1927）について知る人は多くない。今日，その名が思い出されるのは，哲学教育・哲学実践の方法としての「ソクラテス的対話」（socratic dialogue）の提唱者・実践者としてであろう。実際，ネルゾンがさまざまな機会に行ったソクラテス的対話の方法は，後年，その弟子たち，とりわけグスタフ・ヘックマン（Gustav Heckmann, 1898–1996）によって若干修正され，「ソクラテス的会話」（das sokratische Gespräch）としてそれを啓蒙し実践する団体によっていまも継続されている（cf. 太田 2014）。また，このネルゾン－ヘックマンによるソクラテス的対話は，現在，UNESCOが推進している哲学教育の拡大においてもヨーロッパにおける哲学教育の方法のひとつとして取り上げられている（UNESCO ed. 2007）。

たしかに，ネルゾンが現在まで及ぼしている影響という点ではソクラテス的対話を第一にあげねばならない。しかし，ネルゾンの活動は，それだけにはとどまらない。むしろ，ネルゾンの活動は，理論哲学（認識論），実践哲学（倫理学・政治学・教育学）の構築であり，その実践への関わりである。しかも後者は，政治団体の設立と政治運動への関与，田園教育舎の設立

所属：文学部人間学科　受領日　2015年1月30日

と経営など実に多岐にわたっている。しかも重要なのは，理論的活動が実践的活動とが密接に結びついていることである。

私自身の関心もまた哲学教育・哲学実践の方法としてのソクラテス的対話から出発した（太田 2012，2014）。しかし，現在にまで継承されている諸活動だけではなく，その源流を溯り，全体を見渡すことが必要である。つまり，ネルゾンの理論的活動はどのようなかたちで実践的諸活動に関連するのか，また，彼自身が短命であったとしても，彼の哲学が今日ほとんど言及されないのはなぜか，さらに，そこには現在においてもなお見るべきものがあるのか，などである。

ネルゾンにおける理論哲学と実践哲学，実践活動の全体を検討し評価するには容易な仕事ではない。私がネルゾンに取り組むのは，もっぱら教育哲学的関心からである。ネルゾンにとって，教育は若い時からの関心事であり，自らの学校経験に根ざして，教育の革新を志していた。実践哲学（倫理学）の一部として，哲学的教育学を論じ，田園教育舎や青年運動の指導者たちとも親しく交わり，自ら田園教育舎を経営して，ソクラテス的対話を取り入れた教育を行った。また，さまざまな政治団体を設立し，ワイマール共和国時代のドイツで政治活動に極めて活動的に携わった。哲学・倫理学に基づく哲学的教育学の構想，ソクラテス的対話など独自の方法を取り入れた教育実践，これらがどのように結びつくのだろうか。一人の哲学者における哲学・教育・政治の連関，プラトンやジョン・デューイ（John Dewey, 1859–1952）を想起させる。この点こそがすこぶる興味を引くのである。

とはいえ，ネルゾンがこれほどまでに知られていないのは，それなりの理由があるからである。ネルゾンの哲学は〈理性の自己信頼〉（Selbstvertrauen der Vernunft）を標榜したが，その点に関わる内在的な問題があると予想される。それを現代的観点で評価する必要がある。本稿では，それに至る前段階として，ネルゾンの生涯を簡潔に跡づけてみる。これによって，ネルゾンが今日，注目されないままにとどまっている理由が，ある程度，理解できるだろう[1]。

1. レオナルド・ネルゾンの年譜

ネルゾンの年譜[2] をごく簡潔に記せば，次のようになる[3]。

1882

1882年7月11日，ベルリンに誕生。父親は弁護士で，文筆に携わっていた。母親は才能ある女流画家で，卓越した学者一族の出身であった。

1896

堅信礼に際して，一冊の本を送られ，それがネルゾンをカント，フリース，アーペルに導いた。

1901

辛い学校生活の終えて，アビトゥーアに合格。

1901–1904

ハイデルベルク，ベルリン，ゲッチンゲンの各大学で研究生活。

1904

『フリース学派雑誌：続編』(*Abhandlungen der Fries'schen Schule, Neue Folge*) を，ゲルハルト・ヘッセンベルク，カール・カイザーとともに編集し出版。

1907

『フリース学派雑誌』を手がかりに，ゲッチンゲン大学で私的演習を行う。

1908

『リベラルドイツのための国民統一』(*Nationalvereins für das liberale Deutschland*) の編集主幹ウィルヘルム・オールと親しくなる。

1909

ゲッチンゲン大学哲学部自然科学専攻で哲学の教授資格取得。

1910

ゲッチンゲン大学での講義で，哲学的倫理学の諸問題の検討を開始。

1911

ボローニャでの第4回国際哲学会議に参加し，「認識論の不可能性」(Die Unmöglichkeit der Erkenntnistheorie) と題する講演を行う。

1914

第一次大戦の敗戦の日，ネルゾンは国法学に関する講座を「国際連盟について」(Vom Staatenbund) というテーマで締めくくる。

1917

第一次大戦がもたらした混乱に衝撃を受けて，ネルゾンはフリース協会の仲間に向けて，学問的課題を越えて，正義と認識されることについて政治教育実践に尽力するよう訴えたが，フリース協会の共鳴をうることができないので，年下の友人や学生と「国際青年同盟」(der Internationalen Jugendbund: IJK) を設立する。

1918

「哲学政治アカデミー友の会」(Gesellschaft der Freunde der philosophisch-politischen Akademie) を設立。この友の会は，学問的課題を支援し，研究者と教育者の継続教育を行うという目的で計画されアカデミーの設立を準備するものである。

1922

「哲学政治アカデミー」(die Philosophisch-politischen Akademie: PPA) 設立。

1924

子どものためのインターナショナル・スクールとしてヴァルケミューレ (Walkemühle) 田

園教育舎を開設。同じ敷地に，哲学政治アカデミーの建物も建築された。ネルゾンの言葉によれば，この学校は，「健全な子どもを形成するもの，つまり真理・自己信頼・正義感の信用をもたらすことを保障すべく」子どもを援助するのである。この学校ではアカデミーの目的に沿った若い成人向け講座も準備された。

1925

SPD執行部との対立によってネルゾンとIJBの構成員がSPDから脱退（IJBが追求した目的の政治的性ゆえに，構成員は社会主義政党のなかでIJBの構成員であることが条件づけられていた）。

1926

「国際社会主義的闘争同盟」（der Internationale Sozialistische Kampfbund: ISK）設立。これは，政党というものが満足しなければならない政治的・教育的要求の，ネルゾンの判断によれば，必然的な帰結を引き出すものになる。

1927

ソビエト・ロシアを訪問し，ネルゾンが建国に反対して抱いていた考えに関して，ロシアの政治家との論争を試みた。

10月29日，ネルゾン死去。

19世紀末に生まれ，ドイツの自然科学が最も興隆した時代に，その中心のひとつであったゲッチンゲン大学に学んだ哲学者の人生である。だが，それは学的研究に沈潜する哲学者の人生らしくない。政治活動に積極的に関わり，また当時流行した新教育―ドイツ風には改革教育学（Reformpädagogik）―に特徴的な田園教育舎の経営にまで手を伸ばしている点である。

ハイドルンはネルゾンの紹介の冒頭に，友人である政治経済学者フランツ・オッペンハイマー（Franz Oppenheimer, 1864–1943）[4] がフランクフルト新聞（1927年11月2日付）に掲載した追悼文を紹介している。「ドイツの学問はその顕著な姿を，法と国際平和という重大な案件はその最も先鋭な闘士を失った。彼の弟子たちはその師を失って嘆き悲しんでいる。彼は弟子たちにとっては，単なる無尽蔵の善意と忍耐の師以上のものであり，同時に厳格な人生の模範像であった」。そして，これを「ワイマール共和国の最も重要な精神的代表者に関する理解に対して，寡黙な表現でこの人物のかけがえのなさを示している」と述べる（Heydorn1992: 13）。それに対して，フォアフォルトはネルゾンのもう一人の友人エリッヒ・レヴィンスキー（Erich Lewinski，1899–1956）の人物評を取り上げる（Vorholt 1998: 13）。「人はネルゾンについて肯定するか否定するかしかできない。―彼に対してどちらでもよいとか，中立的であることはできないのである。そこにはたしかに彼の人格から発する威圧的な影響がある」（Lewinski 1953: 27）。さらに，ミュラー教授（Georg Elias Müller）―1881年以来ゲッチンゲン大学哲学部の教授，実験心理学教室の設立者―の評価をつけ加える。彼は「強い印象をあたえる若者である」が，

また「まだ未熟な人生経験しかない彼の手に入った哲学をまったく奇妙なしかたで消してしまい，この狭い思考範囲から暫く離れて，批判的検討を加えることが完全に不可能になってしまっている［…］」とネルゾンを批評している（cf. Vanholt 1998: 22）。

ハイドルンはかなり好意的な人物評から，対照的にフォアフォルトはかなり否定的な人物評から，ネルゾンの人生を描こうとしている。おそらく，ネルゾンの周りの人々で，この二つの見方があったのだろう。学生や仲間の人生に大きな影響を与えた人物であると同時に，鋭く尖った自らを恃むところが強い厳しい人物である。多面的に活動するとともに，さまざまに問題を抱えるネルゾンの人柄の一面を象徴しているように思われる。

もっとも詳細な伝記を記した（Franke 1991）は，ネルゾンの生涯を，「青年時代とアカデミックな経歴の開始における困難（1882–1913）」，「第一次世界大戦（1914–1919）」，「社会主義と政治的活動・教育的活動への途（1919–1927）」と大きく3つの時期に区分する。本稿も基本的にこの区分をもとにする。

2. ネルゾンの生涯

1882–1913

出自と家庭

レオナルド・ネルゾンは1882年7月11日，ベルリンのアレキサンダー・プラッツで生まれた。父ハインリッヒ・ネルゾン（Heinrich Nelson）は，東部ドイツのユダヤ人の商家の出身であるが，弁護士となり，さらに法律顧問官となった。母エリザベート・ネルゾン（Elisabeth Nelson）は芸術家と学者の家系に生まれた。ユダヤ人哲学者・啓蒙家として著名なモーゼス・メンデルスゾーンと作曲家フェリックス・メンデルスゾーン–バルトルディ（Felix Mendelssohn-Bartholdy）を先祖に持ち，またその関係から，ゲッチンゲン大学で数学者ガウス（Johan Friedrich Gauss）の後継者となった数学者ディリクレ（Johann Peter Gustav Lejeune Dirichlet）も親戚であった。両親はどの宗教教団にも属さなかった。また，この家は多彩な人物と関係を持っていた。古典文献学者ヴィラモビッツ（Wilamowitz），哲学者ゲオルク・ジンメル（Georg Simmel），生理学者デュ・ボア＝レイモン（Du Bpois-Reymond）と定期的に会い（*jour fixe*），また政治家・実業家ワルター・ラーテナウ（Walther Rathenau）もその一員だった（Heydorn 1992: 13, Hoffmann 1997: 21）。つまり，ネルゾンはユダヤ人とプロテスタントが入り混じったリベラルな家庭に生まれ，典型的に高度な後期市民文化のなかで育ったのである。

少年時代

少年時代のネルゾンは，「いろいろな面で鬱屈し，重苦しい陰鬱さをもつ魂は後の人生にとっ

て重荷をもたらした」という。ほかの子どもと付き合うことはなく，「どんどん自分のなかに引きこもり」，なによりも「自分の孤独」を求める「変人」になった[5]。彼は自然科学の研究者になる熱望に満ちていた。その内向的性格は，母親がもっぱら優位をしめる家族関係に由来すると考えられる。「[…] 家ではおとなしくしていたが，彼は教師に対して，学校に対して，彼から自由と自由な思考を奪おうとするすべてのものに対して反抗した」と回想している（Franke 1991: 56）。

学校時代をベルリンのギムナジウム・王立フランス学院（das Französische Gymansium）で過ごしたが，成績は芳しくなかった。関心は数学と自然科学的分野にあった。父ハインリッヒはこれについて後年，教師たちはそうした専門への関心を目醒たわけではないしている。教師たちはネルゾンを「欠点があり，冷淡であり，才能を欠いている」と見ていた。だから学校生活におけるネルゾンの唯一の目的は，学校ではできるかぎりエネルギーを節約して，学問的研究に勤しむことにあった（Vorholt 1998: 22）。ネルゾンは後にこう判断している。「学校時代の裏側について言えば，強制そのものに責任があるのではなく，むしろ真の精神的な（そして身体的な）活動の欠如と機械的で生気のない教材のあてがい扶持のほうが問題だったのだ」。そして「いわゆる普通教育にわたしはまったく価値をおかず，頭を他人の思想で満たすよりも自分で考えるほうがはるかによいと思っていた」。彼は7回も可の成績を取り，ギリシャ語だけが良と評価された（Vorholt 1998: 22）。

フリース哲学との遭遇

それに対してネルゾンは哲学，とりわけ新カント派ヤコブ・フリードリッヒ・フリース（Jakob Friedrich Fries, 1773–1843）[6] に関心をいだいた。それは1889年に公刊されたエルンスト・ハリアー（Ernst Hallier）[7] の著作『自然科学の発展との関係における19世紀文化史』によって目醒された。ネルゾンはこれを堅信礼の際に贈り物として手に入れた。ほとんど忘却されていた哲学者フリースの再発見と彼の思想のさらなる発展にネルゾンは精力を注いた。フリース哲学との偶然の遭遇によって，ネルゾンの生涯は，まったくの偶然ではあるが，哲学と政治に導かれた。ネルゾンはまさにフリースを「哲学的指導者」として受け入れた。フリースの著作を次々に集め，それは大部になったが，次にその弟子の著作を収集した。ギムナジウム一年生の時，ネルゾンは哲学的議論サークルの設立に関わった。ネルゾンはフリースに夢中になった。

大学生活

学生時代のネルゾンは，フリース哲学の研究とそれに関係する学生団体の設立・指導に明け暮れている。しかし，学位審査や教授資格審査を含めて，大学内外でさまざまな軋轢を惹き起こす。

ハイデルベルク大学における1901年4月から8月の第1セメスターの教養教育（studium generale）の後，ネルゾンは1901年10月の冬学期から1903年の夏学期までベルリン大学で数

学と自然科学を研究した。この時期にはまだ政治学への関心はなかった。「新聞はまったく読まなかった。偶然にレストランに新聞があると，ボーア（戦争）がどうなっているかを読んだだけだった」(Blencke1960:14)。

1903年10月にゲッチンゲン大学に移り，自然科学の研究に力を注ぎ，加えて哲学と心理学を研究した。フリースと同様に，彼は数学的自然科学の分野にはっきりと重点を置いていた。1903年，ベルリン大学とゲッチンゲン大学で二度にわたって学位論文「批判的方法と心理学の哲学に対する関係」(*Die kritische Methode und das Verhältnis der Psychologie zur Philosophie*) という論文を提出したが，不合格。第6セメスターになった1904年7月29日，ゲッチンゲン大学哲学部のユリウス・バウマン（Julius Baumann）教授のもとでの3回めの審査で，論文「ヤコブ・フリードリッヒ・フリースとその最近の批判者たち」(*Jakob Friedrich Fries und seine jüngsten Kritiker*) によって優等の成績で学位を取得した。主専攻は哲学，副専攻は心理学と応用物理学を選択した（cf. Franke 1991, Vorholt 1998)。

すでに1903年，ゲッチンゲン大学では哲学討論サークルから新フリース学派が生まれていた。設立メンバーはネルゾンと並んで，アレクサンダー・リューツォー（Alexandr Rütsow, 1885–1963)，カール・ブリンクマン（Karl Brinkmann)，ハインリッヒ・ゲッシュ（Heinrich Goesch)，ルドルフ・オットー（Rudolf Otto, 1869–1937）である。そこにカール・カイザー（Karl Kaiser)，ゲルハルト・ヘッセンベルク（Gerhard Hessenberg，1874–1925)，そしてリチャード・クーラント（Richard Courant，1888–1951）オットー・マイヤーホフ（Otto Meyerhoff, 1884–1951)，アルツール・クロンフェルト（Arthur Kronfeld, 1886-1940)，パウル・ベルナイス（Paul Bernays, 1888–1977）が関わった[8)]。ネルゾンが主導したサークルの目的はカントとフリースの哲学のさらなる発展にあった。当時のドイツ哲学界の主流は新カント派の二つの主潮流，ヘルマン・コーヘン（Hermann Cohen, 1842–1918）を中心とするマールブルク学派とウィルヘルム・ヴィンデルバント（Willhelm Windelband, 1848–1915）およびその弟子ハインリッヒ・リッケルト（Heinrich Rickert, 1863–1936）を中心とする西南ドイツ学派だった。それに対して真っ向から対立した格好である。

イエナへ旅行し，当地の資料館での調査を通して，従来はよく知られていなかったフリースとその弟子エルンスト・フリードリッヒ・アペルト（Ernst Friedrich Apelt，1812–1859）の仕事を発見・蒐集し，出版した。1904年カール・カイザーとゲルハルト・ヘッセンベルクとともに「フリース学派雑誌：続編」(*Abhandlungen der Fries'schen Schule, Neue Folge*) を発行した。[9)] この雑誌は，ネルゾンの序言によれば，「われわれの哲学」の準備のためである。「それは公衆に影響を及ぼし，それによって最後には実践的生活においても本当の力を獲得しうるのである」(Nelson 1917a: 240)。新フリース学派は，ヤコブ・フリードリッヒ・フリースの甥である国家自由主義党の帝国議会議員オットー・フリース（Otto Fries）から，フリースの著作編集のために大きな財政援助を受けた。この雑誌は最初，ゲッチンゲンのネルゾンの住まいで会合を開き，1909年から1913年まで規則的に多様な会合をもった（Vorholt 1998: 24)。

新フリース学派は，1909年5月にはヤコブ・フリードリッヒ・フリース協会（Jakob Friedrich Fries-Gesellschaft）へと発展した。協会の規約に，その目的はこの哲学を外部から発展させ，その応用を課題とする活動を支持することであるとされている（cf. Vorholt 1998: 25）。

新カント派との軋轢

ネルゾンは1905年，ヘルマン・コーヘンの著作に関する書評を公刊した。ネルゾンの父は後に，この書評によって「すべてのドイツの哲学教授の憎しみ」を買うことになったと回想している。ネルゾンはコーヘンを「モノ知らず」と決めつけ,「ひとたび〈批判〉の味わいを知った人は，およそいっさいの独断的な饒舌を永遠に嫌悪する」というカントの『プロレゴメナ』末尾の言葉で締めくくった。ネルゾンはすでに学位論文ではっきりとコーヘンを批判していた。コーヘンは，自身ではそれに反対のことを要請したが，実は哲学的根本原理を心理学的事実との結合を目論んだのだ。「しかし私が思うに，いやしくも他の者にカントについて教えたり，あるいは自分自身で発展させようと要請したりするのであれば，あらかじめカントを読んでおくのがよいだろう」（Nelson 1973: 72）とまで言い切ったのである。この険悪な批判はアカデミックな領域でネルゾンの困難を著しく大きくした。

コーヘンの弟子エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer, 1874–1945）はネルゾンの批判に，ヘルマン・コーヘンとパウル・ナトルプが編集する雑誌*Philosophische Arbeiten*の短い論文で皮肉っぽく反撃した。ネルゾンの業績はしっかりした事実に則した叙述ではなく，論争的な攻撃，情熱的な言明，冷笑的な批評，中間考察である云々。コーヘンへの批判によって得られたものはネルゾンの学問的に孤立した状態である。

教授資格問題

ネルゾンは教授資格（ハビリタチオン）を二回目の審査でようやく通過した。

ネルゾンは1906年4月には，これまで第10セメスターを過ごしてきたから提出資格があるとしてゲッチンゲン大学哲学部に教授資格論文を提出した。しかしそれは最初の学位請求の際に提出した「批判的方法と心理学の哲学に対する関係」で，それはたった70ページしかなく，そもそも学位請求に失敗した論文である。ネルゾンは審査委員会から「過大な自己評価」と非難された。

受理されなかったのは，二つの大きな理由が想定されている。ひとつは，実験心理学者ミュラー教授が所見で述べているように，この論文は「心理学への哲学への関係」と題されているが，フリース哲学を反復するばかりで，真の直接的認識から偽の認識源泉を区別する「直接的理性認識」の理論になっていないというものである。もうひとつは，先年の書評によるコーヘンへの激烈な批判である（Franke 1991: 74–75）。

フォアフォルトはこの状況を「学問的経歴の決定が純粋な論理だけに対応するわけではない

という事実をネルゾンへの所見が裏づけている」(Vorholt 1998: 27) と評している。

舞台裏には現象学の創始者エドムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859–1938) が控えていた[10)]。フッサールは審査委員会のメンバーではなかったが，ネルゾンのアカデミックな経歴を妨害しようとした。その理由として，フッサール自身はパウル・ナトルプ (Paul Natorp, 1954–1924) あるいはカッシーラーという，マールブルク学派を代表する人物かコーヘンの弟子をゲッチンゲンの教授に望んでいたからだと言われる。ただし，ネルゾン自身はフッサールの哲学上の能力は自分よりも優れていること認めている[11)]。

二年前にはこの論文を学位審査では認めなかったユリウス・バウマン (Julius Baumann) は，今回は受理してもよいと考えていた。また，以前から親密な友情関係にあった数学者ダビット・ヒルベルト (David Hilbert, 1862–1943) とフェリックス・クライン (Felix Klein, 1849–1925) は承認する旨の審査報告を出した。

しかし，そもそもネルゾンはなぜこの論文を提出したのか。すでに忘却の淵に沈んでいたフリースの業績を復権させるという論争がネルゾンには重要だったと推測される (Franke 1991: 76–79)。フリースの哲学はアプリオリな認識を，アポステリオリな，したがって経験的な認識に還元し，意識の心理的分析に哲学の基礎を還元する単なる「心理主義」(Psychologismus) だというのが当時の評価であり，この見解を代表するのがコーヘンだったからである。しかし，この攻撃はネルゾンに大きな負担を追わせることにもなる。

1908年末にネルゾンは「カント認識論の発展史に関する研究」(Untersuchungen zur Entwicklungsgeschichte der Kantischen Erkenntnistheorie) を教授資格論文として完成した。審査委員会ではフッサールが異議を唱えた。新カント派への攻撃の影響を懸念したことと，ナトルプかカッシーラーをゲッチンゲンの正教授に招聘したかったからである (Franke 1991: 99, Vorholt 1998: 27)。しかし，ネルゾンは1909年3月6日ゲッチンゲン大学哲学部自然科学分野で教授資格を得た。そこにはヒルベルトをはじめとする数学自然科学分野からの援助が大きく働いていた。

このハビリタチオン問題とその影響のもとで展開する正教授職の問題は，ネルゾンの大学での活動にとって重大な意味を持ってくる[12)]。

新教育への関心

1907年には改革教育学者ヘルマン・リーツ (Hermann Lietz, 1868–1919) との交流が始まった。5月の聖霊降誕祭休暇の時，ネルゾンはローン (Röhn) のビーバーシュタイン (Bieberstein) にリーツの田園教育舎を初めて訪問し，感銘を受けた。訪問の後，ネルゾンはその経験を両親に宛てて書いている。「ここは素晴らしいところだ。もう一度学校に通えないのは残念だ[…]。いろいろな授業を参観した。[…] これは非常にすばらしい。これまで夢見てきたようなことがすべて文字通り現実にある」(Blencke 1960: 27)。ネルゾンはリーツの田園教育舎と頻繁に連絡を取り，1910年になると，他の新教育にも関心を広げた。9月にはヴィッカースドルフ

（Wickersdorf）のグスタフ・ヴィネケン（Gustav Byneken, 1875–1964）の自由学校共同体（Freie Schulegeminde）も訪問した。ドイツ田園教育舎友愛協会（Verein der Freunde der deutschen Landeserziehungsheime）にも加入，1912年12月にはベルリンの年次総会にも出席した。ザーレム城の設立者，クルト・ハーン（Kurt Hahn, 1886–1972）[13] とはネルゾンはすでに若い時からベルリンでつながりを持ち，家族ぐるみの付き合いがあった。こうした新教育の代表者たちはネルゾンの教育理論的仕事の形成に大きな影響を与えた。とりわけ，リーツの性格教育とその教育実践にネルゾンは後にふたたび結びつくことになる。

レオナルド・ネルゾンは1907年8月エリザベート・シェマン（Elizabeth Schemann）と結婚したが，1910年までには離婚した。結婚によって息子ゲルハルトが生まれたが，彼は第二次世界大戦で戦死した。エリザベートは後に哲学者パウル・ヘンゼル（Paul Hensel, 1860–1930）と再婚し，1954年に亡くなった。

政治活動への参加

1907年，ネルゾンは直接的な政治活動に向かうようになる。しかし政治はさしあたり，さまざまな他の活動の補完に過ぎなかった。ある手紙でこう書いている。「私にはいつも副業が必要なのです。ベルリンでは芸術，ゲッチンゲンでは政治です」（cf. Blencke 1960：27）。ゲッチンゲンの左派リベラル自由思想協会を通じてネルゾンはフリードリッヒ・ナウマン（Fridrich Naumann, 1860–1919）と知己になった。ナウマンは第二帝政期にリベラル派を代表する政治家・言論人として，政界・メディアなどで活躍した人物である。ネルゾンは，信頼に足る唯一のドイツの政治家であると評価していた。社会問題を熟知し，政治改革・社会改革に乗り出しているからである（Blencke 1960: 27）。

この時期のネルゾンの政治活動は左派リベラリズムに分類される。1908年11月23日，ゲッチンゲンで開催された学術自由同盟の設立会合での講演「リベラルとはなにか？」（Was ist Liberal?）でネルゾンは自らのリベラルな世界観の基礎を定めた。ネルゾンは世界観という言葉で政治的党綱領を理解した。「リベラリズムは理性の自己信頼の原理である」（Nelson 1908: 11f.）。ネルゾンはリベラルな倫理を要求した。「倫理的リベラリズムがなければ，政治的リベラリズムはありえない。しかし，学問的リベラリズムがなければ，倫理的リベラリズムは存在しえない。そしてわれわれは今日，学問的リベラリズムをもっていないのである」（Nelson 1908: 17）。その解決はもちろんカント的であり，リベラリズムの運命は「理性批判」の成功と不可分だという。「カント哲学は人類史におけるリベラリズムの大いなる労苦である［…］」（Nelson 1908: 13f.）。ところが哲学的リベラリズムは忘却の淵に沈んでいる。それを公的な議論に浮上させる必要があるのだ。

ネルゾンはゲッチンゲン学術自由同盟（das Göttingen Akademische Freibund）の議長となった。1909年の自由同盟の会合でネルゾンは「リベラリズムの哲学的基礎」（Die philosophischen Grundlagen des Liberalismus）という報告を行った。ここでネルゾンは「理

性批判」を「理性によって命じられ人間の活動の制約以外では制約されない」という格律として規定した。ネルゾンは「リベラリズムとは理性だけによって制約された自由の原理である」(Nelson 1910: 30) と規定し，それを構成する3つの原理を確認した。思考の自由の原理・良心の自由あるいは倫理的自由の原理・外的行為あるいは政治的の原理である。思考の自由は寛容の原理によって規定され，倫理的自由は自分の理性の要求以外の規定根拠からの意志の独立を意味する。政治的自由は法の前での万人の平等を意味する。それは個々人あるいは個々の集団の利害には奉仕せず，利害の正当な平準化に資する法である。「正義は人格的尊厳の平等を要求するが，物理的所有あるいは権限の平等を要求するのではない」(Nelson 1910: 40)。

こうしたスローガンによってネルゾンは社会形成についての社会主義的要求からはっきりと離れる。「法の前での平等，既存の国家の方向，法的保護の公共性は狭い意味での政治的リベラリズムの一般的根本要求である」。この理念の積極的実現は倫理的拡大である。それは一個の法則によっては手に入れることはできない。

しかし，国家主義的学生組合や学生結社連合（ブルシェンシャフト）との，そしてそれに呼応する激烈な反対との闘争を繰り返した後，ネルゾンは学術自由同盟の内で守勢に追い込まれ，1911年には議長を辞任せざるをえなかった。

この時期にネルゾンに重大な影響を与えたのはウィルヘルム・オール（Whilhelm Ohr, 1877–1916）である。彼は，1907年に設立された「リベラル・ドイツ国民協会」(das Nationalverein für das liberale Deutschland）の設立者である。ネルゾンはオールから政治教育者・教育組織・教育事業と政治的アカデミーの思想における厳密な規律の理念を受け継いだ（Nelson 1917b: 439f., 446)。国民協会の教育事業はネルゾンをはじめて直接に労働者と接触させることになった。デュッセルドルフ労働組合書記アントン・エルケレンツ（Anton Erkelenz, 1878–1945）ともに，労働者向けセミナーを実施した。

講義と研究

1909年の教授資格取得ののち，ネルゾンは私講師としてゲッチンゲン大学で講義を持った。講義は，認識論，倫理学，教育学，宗教哲学，法および国家哲学，数学と自然科学の哲学的問題など多岐にわたった。ネルゾンは1905年から1914年まで数学の哲学的問題，自然科学の哲学，哲学基礎（認識論，真なる関心がの理論）に学問的に取り組み，さらにカントとフリースの研究に精励した。

また，多くの学会で報告した。1908年9月，ハイデルベルク大学で国際哲学会議が開催され，そこでネルゾンは多くの講演で議論に参加した。1911年にボローニャで開催された第4回国際哲学会議でネルゾンは「認識論の不可能性」(Die Unmöglichkeit der Erkenntnistheorie）というテーマで講演した。

1914–1918

第一次世界大戦はネルゾンの活動の大きな転機となった。政治運動の関わりが著しく高揚する。また，正教授への昇格で紛糾するが，哲学の講義・研究では実り多かった。

政治活動

1914年夏学期，ネルゾンは「法哲学と政治」に関する講義を行った。そして1914年7月31日，第一次世界大戦が勃発する。講義の最終回に「国際連盟について」（Vom Staatsbund）をテーマにする。大戦はあらゆる国家のパワーポリティクスにもとづく闘争の始まりだったが，それに対してネルゾンは諸国民の間の恒久平和状態を主張して講義を終えた。「諸国民の恒久的平和状態の実現に向けた仕事に全力を上げて参加することはすべての教養ある者の義務である」（Nelson 1914: 56）[14]。

1914年9月，ネルゾンは論理学者クルト・グレーリング（Kurt Grelling, 1986–1942と共著で「国際連盟の導入とそれと結びつくべき国内改革に関する報告書」（Nelson 1972: 59–110）を公表した。グレーリングはネルゾンと1906年から変わらぬ友情関係を結び，新フリース学派，フリース協会の一員であり，国際青年同盟の仕事にも参加した[15]。報告書の中で，著者たちは，世界国家連盟の方向とその前段階としてヨーロッパ国家連盟を提案する。内政的には，従来の階級社会を民主化と社会化によって転換し，共和的憲法をもつ法治的国民国家にすることを述べている（Vorholt 1998: 31f.）。

しかし両者の意見の相違から，1914年10月ネルゾンは報告書への責任を一人で負うことになった。意見の相違はなによりも戦争におけるドイツの位置の判断と国際連盟の提案内容にかかわっていた。ネルゾンは依然として完全にブルジョア側に立っていた。彼は中間勢力の早い勝利を望み，帝国の再建によい見通しをもっていた。報告書の第二部は「内政改革」と強調しているが，ネルゾンの政治的要求とその帰結という点で，明らかに第一部の結果である。後年，ネルゾンは「リベラルな社会主義者」（liberaler Sozialistit）に数え入れられるが，それをはっきりと想起させる内政改革案は次の5点にまとめられる」（Nelson 1972: 107f.）。

・国民の権利の拡大：プロイセンの選挙権の改革，すべての市民の平等な扱い
・社会政治（社会保障）：社会保障，労働権の改革，平等な教育機会，統一学校
・精神の自由の保証：国家と教会の分離，教師の倫理的職業教育
・国籍問題の解消：他国籍者に対する差別の撤廃
・軍需産業の国営化：（社会民主主義の側からすでに長い間正当に要求されていた。）

ここでネルゾンはフリードリッヒ・ナウマンの政治的確信を共有する立場に立っている。制約された国家主義的帝国主義的政治も要請しなかったが，ネルゾンは内政の社会的改革の前提のための前提として強力なドイツ帝国も要求した。

徴兵

1917年9月はじめ，ネルゾンはゲッチンゲン連隊に召集された。ネルゾンは，年来の不眠症という診断書をもって軍務を回避しようとしたが，10月にはカッセル駐屯地歩兵連隊に転属した。そこで1918年夏に除隊するまで，新聞の切り抜きの収集・選別に従事した。

教育研究活動

戦争の混乱はネルゾンにとって転機となる体験だった。ネルゾンはそのために，純粋に学問的な課題に取り組み，理論的認識の教育的－政治的徹底に積極的に着手することを求め，フリース協会のメンバーにこの途に引き入れようとした。しかし，これまで学問的仕事しかしたことのない協会の一部はネルゾンの意図に耳を貸そうとはしなかった。

1917年ネルゾンは『倫理学基礎講義』(*Vorlesungen über die Grundlagen der Ethik*) 三巻本の第1巻『実践理性批判』(*Kritik der praktischen Vernunft*) (Nelson1917) を，戦争による困難はあったが，出版した。この三巻本がネルゾンの主著とみなされている[16)]。

正教授問題

研究上の成果は上がったが，ネルゾンは生涯にわたって正教授 (Ordinarius) になることはできなかった。1919年，3回めの挑戦で，ようやく「厳密科学の体系的哲学」(Systematische Philosophie der exakten Wissenschaften) という名称がついた助教授 (auβerordenticher Professor) となった。その理由のひとつにはネルゾンの政治的関与にある。ネルゾンは第一次大戦期に平和政策に深く関与することで，多くの対立を―とりわけゲッチンゲン大学内で―抱え込んだからである。もう一つは，厳格というよりは傲慢と呼ばれても仕方ないような自身の性格に起因する。これによって，その学問上の経歴を，詳細には把握しきれないほどの論争に終始することになった。ネルゾンは学部の同僚との友情を結んだり，後援者を得たりすることはできなかった。唯一，共同することができたのは数学者と自然科学者だけであった。

ネルゾンは「近代ドイツ科学における反動的傾向への厳しい批判者」だったことは間違いない (cf. Vorholt 1998: 36)。しかしそれだけではなくシュネーデルバッハが指摘する当時の大学における「学問/科学の構造変化」，とりわけ哲学の位置が如実に反映している (Schnödelbach 1983 = 2009)。歴史主義と科学/学問の基礎づけという問題である[17)]。それが哲学部内のポストをめぐって歴史派か科学派かの綱引きになる。

数学講座主任ヒルベルトは，ネルゾンの招聘を何度も後援した。1917年にはじめてネルゾンに教授昇格の話が持ち上がった。哲学部歴史文献学部門はフッサールのその地位を確保したが，数学自然科学部門はネルゾンを押すヒルベルトの指導によってそれに反対した。だが成功せず，ネルゾンは「尖った形式主義」を批判され，青年たちへの絶大な影響を非難された。二回目の招聘ではネルゾンは候補にならず，ヘルマン・ノール (Hermann Nohl, 1879–1960) が

指名され，ゲッチンゲンではディルタイ学派が定着することになった。

それに対して，ヒルベルトのイニシアティブによるとみられるネルゾン支持の陳情書が提出された。そこには36人以上の人物が名を連ねており，代表者は教授20名と9名の私講師だったが，その大部分は数学と自然科学分野で，そのうち20名はゲッチンゲン出身であったが，哲学はたった1名だった。陳情書の署名者は，大学の実験心理学を志向する哲学研究者と歴史的アプローチを取る哲学研究者が区別できる。ネルゾンはこの両方の学派を結びつけることができる唯一の代表者だったからである。文部省は1918年10月に妥協案として，数学自然科学部門の提案を容れ，ネルゾンを哲学部の厳密科学の体系的哲学の助教授とするよう提案した。定員計画にない助教授案に大学は1919年1月に同意し，ネルゾンとモーリッツ・シュリック（Moritz Schlick, 1882–1936）[18] を提案した。文部省は1919年6月18日付でネルゾンに決定した（Hoffmann 1997: 352）。ネルゾン自身は，哲学部が自分の仕事を認めるという幻想をもはやもたず，たとえば数学のような別の学問領域による確認をますます当てにするようになった（cf. Vorholt 1998: 36）。

軋轢と孤立

彼の政治活動とほとんどファナティックというべき厳格性によって，ゲッチンゲン大学では何度も衝突を繰り返すことで，ネルゾンは大学運営からはますます退けられ，自らも一線を画し，クーラントやヒルベルトという仲間にして後援者さえも身を引くことになった。

ネルゾンの難しさとゲッチンゲン大学内での対立はいろいろな方面で生じた（cf. Henry = Hermann 1985: 186）。典型的なのは次のようなケースである。1920年，ネルゾンは，新入生がある学生の指導の下に復習するために講義室をひとつ用意するよう要求した。しかし，学生による教授活動は認められないという指示とともに哲学部に拒否された。するとネルゾンは教授団を脱退してしまった。学長宛に脅迫にも似た抗議の書簡を出した。そしてネルゾンは各方面で服務宣誓を拒否するようになった。服務宣誓は大学教授の指名には不可欠なのだが，ネルゾンにとって服務宣誓は「物理的不可能事にも匹敵する，道徳的不可能事である」。文部大臣ヘーニッシュ（Haenisch）はゲッチンゲン大学によって下された決定を確認したが，ネルゾン自身は問題は自分の書簡がもたらしたとみなした。「自分が哲学教授というブルジョア的職業に就いていることを遺憾に思う新しい理由を見出した」。「大学との軋轢にはネルゾンの性格のひとつの特徴が一層はっきりしてくる。それは，自分が正しいと確信すると，いかなる妥協も受け入れることはできず，これ以上ない激烈さで，自分のものの見方を擁護するという特徴である」（cf. Vorholt 1998: 37）。

もうひとつネルゾンという人間にとって決定的なのは，教会への態度である。ネルゾンの宗教および教会制度の拒否は，人間の自律性という政治的認識を極めて密接に関係している。「精神的独占関係」は依存を生み出す。なぜなら，教会は，魂の幸福を評価する手段を排他的に所有する立場にあると考え，魂の幸福に至るための条件を他の人間に命令することができると信

じているからである。「精神の自由の権利」を保障するのは国家の課題である。これは，人間を人為的な後見の下に置くことを目的とするようなすべての制度と国家が対決することを含意している。「ある国で窃盗・文書偽造・毒殺が法の力によって防止されることが自明であれば，その国では魂の殺害が国家によって保証された活動として行われてはならない」(Nelson 1924: 393)。理性的自己決定は人為的な後見からの自由にあるというのがネルゾンの格律である。教会制度の拒絶は哲学的に根拠づけられる。

教育学への関心

ネルゾンは大学での活動の外でもますます孤立に追い込まれてゆく[19]。すでに1911年，ネルゾンはゲッチンゲン学術自由同盟の議長の職務を，厳しい政治的対立によって退いていたが，1916年11月に起きた新たな対立によって，完全に脱退することを余儀なくされた。ネルゾンは，ブルジョア的青年運動の提携には，1913年10月のホーヘン・マイセンでの集会以来，支持する立場をとっていたが，まもなくこの運動の政治的中立性と受動性を知ることになった。青年運動へのこの転向はネルゾンの論文でも確認できる。当時印刷された彼の仕事の重点は新しいテーマが見えている。教育学である。この時期に一連の教育学関連の仕事（Nelson 1971: 353–362, 387–415）が執筆され，1917年には論文集『自己信頼の教育による心情の改革』(Nelson 1917a）が出版された。

国際青年同盟（IJB）の設立

リベラル・ドイツ国民協会の活動はすでに1913年には退潮に転じ[20]，その立て直しがなされていたが，第一次大戦の勃発によって，すべてご破算になった。こうした状況からの脱出を図ったのが，1917年4月の国際青年同盟（der Internationale Jugend-Bund: IJB）の設立である。IJBはネルゾンの学生たちのグループから生まれた。ネルゾンは，自分の学生を実践的政治活動について確信を持たせ，この組織に糾合し，未来への展望を抱かせた。その賛助会員にはアルバート・アインシュタイン（Albert Einstein），ケーテ・コルヴィッツ（Käthe Kollwitz），アントン・エルケレンツ（Anton Erkelenz），エリザベート・ロッテン（Elizabeth Rotten），フランツ・オッペンハイマー（Franz Oppenheimer）が名を連ねた。

IJBの立場はネルゾンの哲学に立脚しており，メンバーには禁酒禁煙の生活，教会からの離脱，そして社会主義政党への加入が求められた。この最後の点で，IJBの設立はネルゾンがリベラリズムから離脱し，社会主義に接近したと評価される場合もある。しかし，マルクス主義，とりわけ史的唯物論の拒絶は生涯一貫していた。ネルゾンは，リベラリズムから離れたが，自由の平等という「根本価値」を優先し，その後で二つを相互に結びつける。根本的転換は，自由の形式的法的側面への自由，つまり自己発展の権利を要求せず，自由概念の第二の平面を取り入れた点にある。「平等」という価値—あるいは「正義」—を自由概念の上におけば，それが意味するのは，自由は平等原理によって制約されねばならないということである。あるいは，

別の表現を取れば，自由には形式的-法的側面とならんで自由の実質的側面，つまり自己発展の可能性も存在するということである。平等とはしたがって万人にとっての平等の自由あるいは平等の生存機会として理解される。自由概念のこの側面を強調する点，ここにネルゾンが政治的リベラリズムから倫理学にもっとも対応する政治的プログラムとしての社会主義へと移行する論理的な分岐点が存在するのである（cf，Vorholt 1998: 40）。

国際青年同盟のメンバーは労働運動に積極的に関わった。困難な点があるにも関わらず，ネルゾンは社会主義運動は将来有望だと見ていた。「教養ある者」は，社会を理性という基準によって形成するという課題に失敗したからである。

ネルゾンは1918年にドイツ独立社会民生党（USPD）のメンバーとなったが，後にまた脱退した。ネルゾンが社会民主党（SPD）に入党しないことについて，密接な友人ウィリ・アイヒラー（Willi Eichler, 1896–1971）は回想で二つの理由を挙げている。ひとつは「SPDが史的唯物論を採用した」こと，もうひとつのより深い理由は，SPDが「メンバーの精神的革新に取り組まない」ことである（cf，Vorholt 1998: 40）。1923年，ネルゾンは今度はSPDに入党した。

ミンナ・シュペヒトとウィリ・アイヒラー

ネルゾンのもっとも親密な助手となるミンナ・シュペヒト（Minna Specht, 1879–1961）はヴァルケミューレでの活動以前は教師として働いていたが，1906–1909年，1912–1914年，シュペヒトは自分の職業活動を中断し，歴史・地理・哲学・数学をゲッチンゲンで学んだ。彼女自身の報告によれば，1914年にネルゾンとはじめてゲッチンゲンで出会った。1914年から1917年にゲッチンゲン大学で数学を学び，そこでネルゾンと知り合った。最初はあまり親しくなかったが，後には生活共同体にまで発展した。そこでシュペヒトはまずネルゾンの教育理論の具体化に集中した。さらに，シュペヒトは政治的にもネルゾンに同調し，ネルゾンの没後には「ネルゾン運動」（Nelsonbewegung）の指導者となった。全面的かつ断固として支えるシュペヒトにネルゾンは全幅の信頼をおいた。シュペヒトやグスタフ・ヘックマンなどの信奉者なしにはネルゾン理論を政治的・教育学的なプロジェクトに転換することは不可能だったと言われている。

また，1919年にネルゾンはIJBでウィリ・アイヒラーと知り合う。彼はベルリンのブルジョア家庭の出身であり，ミンナ・シュペヒトとならんでネルゾンにとって重要な人物である。

哲学政治アカデミー（PPA）

IJBを支えたのは1918年12月1日に設立された「哲学政治アカデミー友の会」（Gesellschaft der Freunde der Philosophisch-politischen Akademie）である。企業家ヘルマン・ルース（Hermann Roos）による12000英国ポンドにもおよぶ寄付によって，この協会はかなりの力を得た[21]。資金は利子を得るために投資に回された。友の会議長はフランツ・オッペンハイマーである。

1919–1927

ネルゾンの晩年にあたる約8年は政治と教育の実践活動によって覆われるかのようである。ネルゾンの晩年は，ほとんど想像できないぐらいの仕事の重圧がかかっていた。ほとんど不眠不休で働いた。ゲッチンゲンが活動拠点であり，そこから全国に組織を作るために出かけていた。たとえ気晴らしに旅行をしても，それを哲学政治的な教育活動に結びつけ，訪問地でそれを行った。「思考の合理性が生活と仕事の配分の合理性に反映されていた。一時も無駄にはされなかった」(Heydorn 1992: 22f.)。

ソクラテス的方法

1922年12月11日，ネルゾンはゲッチンゲン教育協会で，のちにきわめて有名になった講演「ソクラテス的方法」(Die sokratische Methode)(Nelson1970: 270ff.)を行った。ソクラテス的方法は，人間を理性的自己決定に向けて教育するネルゾンの教育学の重要な部分である。ネルゾン自身もこの方法の達人であり，大学での演習や成人学校やIJBの授業でも用いていた(Franke1991: 182ff.)。

ヴァルケミューレ田園教育舎

1923–24年にかけての重要な出来事は学校計画の実現である。

哲学政治アカデミー(PPA)は1922年7月11日に設立され，国際青年同盟の仕事を，のちには国際社会主義は闘争同盟を支援する[22)]。PPAの広範な目的はフリースの学問的業績の新たな編集，そして政治家と教育者を一貫して形成する自らの学校の設立であった。この学校，ヴァルケミューレ田園教育舎(Landeserziehungsheim)はヘッセン州アデルハウゼンのメルズンゲン(Melsungen, Adelhausen in Nordhessen)近くに建てられ，1924年5月1日，ミンナ・シュペヒトとルードヴィッヒ・ヴンダー(Ludwig Wunder, 1879–1949)によって開設された。ヴンダーはリーツの田園教育舎ビーバーシュタイン(Bieberstein)校の教師だったが(Ziechmann 1970: 193ff., 山名 2000)，1919年にメルズンゲンの古い織物工場を手に入れ，1921年5月から自ら田園教育舎を経営していた。1922–23年にかけてネルゾンを訪問してその哲学に魅了され，自分の田園教育舎をネルゾンに委ねた。PPA友の会からかなりの援助を受けて，近代的な学校となった[23)]。1923年8月，国際青年同盟の第5回同盟議会がヴァルケミューレで開催された。ネルゾンはウィリ・アイヒラーをゲッチンゲンからヴァルケミューレに送り込み，設立に協力させた。

学校は1924年5月1日に開校し，シュペヒトとヴンダーが共同で指導し，ネルゾンはPPA議長として学校を監督した。しかしネルゾンとヴンダーはすぐに意見の違いを生じ，ヴンダーは責任をとって11月27日に学校を去り，後に別の田園教育舎をウルム近郊のヘルリンゲンに設立した。ネルゾンはヴァルケミューレの住人を前に，決別は双方の合意によって行なわれたと

報告した[24]。原因としてネルゾンがあげたのは，国際青年同盟とヴァルケミューレにおける仕事を一緒に行うことはけっして「会員資格ではなく，持続的な実験」であって，仕事から退くための準備を含んでいるということであった。その後，シュペヒトが一人で指導の責任を追うことになった[25]。

学校は，IJBの構成員ための幹部学校（Funktionärsschule）と基幹学校部（Grundschulzweig）の二つに分かれている。前者は3年間のコースからなり，参加者は英国・中国・スイス・チェコスロバキア出身など多くの国にわたって，インターナショナルだった。また大人の優越性は，子どものために「今日の社会秩序から抜け出す」避難所を作り出すために用いられねばならず，子どものために，国・人種・階級の違いに関わらずそのような避難所を提供するのがヴァルケミューレである。だから，寄宿は寄付によって維持され，物質的条件を考慮せずに誰にでも開かれていた。これはすべての田園教育舎が実際には挫折した問題である。

基幹学校部での教育は，当時の新教育と同様に座学だけではなく，観察・体験・労働や文化的催し物が含まれていた。それだけではなく，どちらの学校でも，ソクラテス的対話が授業において大きな位置を与えられていた。ヴァルケミューレはそのための長期の実験場でもあった。また，試験はあったが，通知簿はなかった。ネルゾンによれば，「この学校の教育の固有性について述べることがあるといえば，一つだけである。この学校では嘘をつく必要のないということである」（Nelson 1971: 578）。これは，万人に不分明なものは共同の意識に高められねばならないし，理性はそこに内在し，偶然性を取り除かねばならないが，そのように人間が自分自身になることができる場を提供するというネルゾンの教育理念にもとづいている[26] [27]。

国際社会主義者闘争同盟（ISK）の設立

IJBが1925年11月に社会民主党から脱退したのち，1926年1月1日国際社会主義者闘争同盟（der Inernationale Sozialistische Kampf-Bund: ISK）が設立された。IJBは1926年4月まで存続した。社会主義のマルクス主義的基礎づけへの批判をまとめた論文の中でネルゾンは「革命的修正主義」を自任した（Nelson 1972: 573）。労働運動は，国内的秩序を再建するために呼び出される力だと認識していた。ネルゾンはたしかに革命的だった。社会を根底から変革しようとしたからである。しかし，マルクス主義的史的唯物論とそこから導かれる社会主義の根拠づけを，カントの上で構築されるべき倫理的必要性とみなしたことは修正主義的であった。1933年以降，ISKは地下で活動し，1945年まで存続した。戦後まで生き延びたメンバーの大部分は最終的にSPDに所属した。

ソ連旅行

1927年4月ネルゾンはシュペヒトとともに，ソ連を知る機会を持った。モスクワへの旅行から帰るとネルゾンはソ連の原則的な，しかし現実主義的でもある政治に対して批判的な判断を下し，翻って民主主義を評価した。

死

ネルゾンは1927年10月29日に45歳でゲッチンゲンで死亡した。遺言でPPAを相続人に指名した。埋葬地はヴァルケミューレの敷地であった。しかし，1933年にヴァルケミューレが占領された時，遺体はメルズンゲンのユダヤ人墓地に移された。現在でもネルゾンの墓はそこにある（Franke1991: 223f.）。

レオナルド・ネルゾンとは

フォアフォルトは，ゲッチンゲン大学時代によく知っていた物理学者マックス・ボルン（Max Born）の人物評を紹介する。ボルンは何回か，哲学討議の催しでネルゾンと同席した。しかしある時，もう来るなと言われた。彼の哲学に対してボルンの議論が彼の信奉者を混乱させたからである。ネルゾンは学問的には非の打ち所のない人々と並んで，「奇妙な変人たち」（Kaeuse und Sonderlige）と惹きつけた。ヘルマンはノールの人物評を引く。ネルゾンは「……対立の世界に入り込んだ。なぜなら，ネルゾンは自分の確信を極めて真剣にとっていたので，それに従って生き，それを他の人々にも求めたからである」（cf. Hoffmann 1997: 357）。

多くの者は，厳格で根本的で，人格やプライベートなことにまで踏み込んでくる要求に耐えることはできなかった。ネルゾンには教義（ドクトリン）の要素がはっきりと見て取れる。もし政治的セクトと見るならば，たしかに「ネルゾン運動」というのがあたっているだろう。ネルゾンは自分の支持者に，部分的には，青年運動の原理に一致し，あるいは労働運動，禁酒，禁煙の原理に一致することを求めた。加えて，菜食主義，無神論，役員集団の独身主義を求めたが，これは長年の対立の火元となった[28)]。他方，ネルゾンが獲得し得たもの，あるいは，理念によって絶対的に確信したものは残った。ハイドルンに言わせれば国際社会主義者闘争同盟のメンバーが被った犠牲は，この倫理的根本態度からのみ説明できるのである（Heydorn 1992: 24）。

ネルゾンは，内的な矛盾を抱えた扱いにくい人物であった。彼の人格は，その基本的要求と同様に険しく傲岸に感じられる議論ゆえに，他の人々に対し，一面では非常に否定的な，他面ではその後の人生に決定的な影響を与えたのである。

3. 小結

ネルゾンの生涯を概観すると，ネルゾンの哲学が忘却の淵に沈んでいる理由がその人物と性格にあるのではないかとの印象を拭いきれない。実際，フランケは，ネルゾンという人物が忘却されている外在的理由として次の4点をあげている（Franke 1991: 229）。

1. ネルゾンの人柄と哲学はすでに存命中から殆ど知られていなかった。何よりも，険しく傲岸だと感じられた論争がネルゾン自身を関心の埒外におくことになった。
2. ネルゾンはドイツ哲学の学問的議論にほとんど加わらなかった。教授資格審査ではゲッチ

ンゲン大学の哲学の同僚以上に，数学者・自然科学者の支援を仰ぐことになった。

3. ネルゾンの論理―数学的議論スタイルは当時のドイツ哲学に対してことさら拒絶的だった。特に1933年以降，1945年以降でもまだ，合理的哲学実践はほとんど共感を得なかった。
4. ネルゾンのセクショナリズムとも感じられる多くの活動が学問活動からネルゾン自身を遠ざけた。

これに加えてビルンバッハーは次の4つの外在的理由を指摘する（Birnbacher 1998: 28）。

1. 明晰な言葉で言葉で表現しようとする哲学はドイツでは容易に，深さの欠如との疑いをかけられることになった。
2. 理性志向的なドイツ哲学者の大部分は国家社会主義の時代，国外への移住を余儀なくされた。その結果，分析哲学系の哲学者たちのほとんどが，ネルゾン哲学を熟知していたポッパー（Karl Popper, 1902–1994）やクレーナー（Kröner）も同様に英語圏へ亡命してしまった[29]。
3. ネルゾンを受容した分析系の卓越した哲学者が，ネルゾンにまったく，あるいはほとんど言及しなかった。たとえば，倫理学者ヘア（Richard M. Hare, 1919–2002）がそうである（Franke 1991: 49）[30]。
4. 哲学における言語論的転換によって，意識哲学的パラダイムを取る新カント派哲学は（ネルゾンを含めて）時代遅れのものとみなされるようになった。

しかし，これは外在的理由であって，ネルゾン哲学そのものには触れていない。内在的理由としては，ビルンバッハーは，まずフリース由来の「心理主義」（Psychologismus）の評価があげられる。それは端的に言えば，アプリオリな総合知は，一定程度〈曖昧〉であり，精神の奥底に隠れた認識過程の提示（Aufweiss）を経てようやく獲得されるとする。この立場は，現在では事柄からして，誤りであろうと判定される。ネルゾン哲学のまさに要であるから，事は重大である[31]。さらに，ネルゾンの叙述には，不完全で部分的・断片的なものが多くあることを指摘する[32]。

とはいえ，ネルゾン哲学に今日においても評価しうる点，アクチュアリティーがないわけではない。

冒頭に指摘したように，ネルゾンはまず，哲学教育・哲学実践におけるソクラテス的対話の提唱者，「ソクラティカー」として知られている。それは，哲学を討議的・了解志向的・合意志向的な活動と見なすことである。それは今日の討議理論（Diskurstheorie）の特徴であるだけではなく，ソクラテス的方法の具体化でもある。しかし，ビルンバッハーはネルゾンにとってソクラテス的方法が「方法」に過ぎなかった点を強調する。つまり，経路であって目的ではなく，また，いくつかある経路のうちの一つにすぎない。むしろ，ビルンバッハーがネルゾン哲学のアクチュアリティーとみなすのは，なによりもその倫理学である。対極的にある原理，カント的原理と功利主義的原理を結びつけようとする倫理学である（Birnbacher 1998: 15–26）[33]。ネルゾンの生涯で確認したように，その政治学も教育学もこの倫理学の一部である。したがって，政治的実践も教育的実践も，あらためて倫理学との関係で検討する必要がある。

［付記］本研究は2014年度JSPS科研費26381044の助成を受けたものである。

注

1)〈理性の自己信頼〉はL. Nelson（1975）にもあるように，私淑するフリースから受け継いだネルゾンの哲学の，したがって倫理学や教育学の基本的方向を示す標語である。本稿はネルゾンの哲学を描く出発点である。

2) たとえばM. Specht & W. Eichler eds.（1953）にはネルゾンを直に知っていた人物たちの回想が残されている。教育学者H.- J. Heydorn（1992）はネルゾンの生涯と業績をコンパクトに記している。H. Franke（1991）は，当時の状況や人間関係を含めて極めて詳細に扱っており，基礎的な資料である。政治学者U. Vorholt（1998）は，1980–90年代になって初めて公開された資料を加えながら，Frankeの叙述を簡潔にするかたちで，政治活動に焦点を当てて叙述している。本稿は基本的にこれら3点をもとにし，さらに新カント派の教育学という文脈でネルゾンの教育学を位置づけようとするD. Hoffmann（1997）を参考にして叙述する。これらにはドイツの文書館や大学の所蔵資料が数多く引用されているが，未見のものが多い。したがって，これらに関しては再引用箇所を示すに留める。

3) 編集者グレーテ・ヘンリー＝ヘルマン（Grete Henry-Hermann, 1901–1985）は，ゲッチンゲン大学で数学者エミー・ネーター（Emmy Noether: 1882–1935）のもとで学位を取得した数学者・物理学者である。同時にネルゾンのゼミナールに出席し，大きな影響を受けるとともに，その哲学・倫理学に対して鋭い批判を行った人物である。また，この年譜にはネルゾンの代表的な論文・著作があげられているが，ここでは省略した。

4) フランツ・オッペンハイマーはユダヤ系の社会学者，政治経済学者。もともと医師であったが，政治・経済に興味を持ち，経済学の学位を取得。政治家フリードリッヒ・ナウマンと知り合う。

5) 後にネルゾンの私設秘書となったベアーテ・ギシン（Beathe Spindler-Gysin）の証言（cf. Vorholt 1998: 22）。

6) フリースに関しては，ヘーゲル『法哲学綱要』（Grundriss derPhilosophie des Rechts, 1821）序文の辛辣な言及がよく知られている。

7) ハリアーは，ベルリン，イエナ，ゲッチンゲンなどで学んだ植物学者・菌類学者。フリースの影響を受けており，自然科学的観点からの哲学的著作も物した。

8) リュストウは社会学者で，自由放任とは区別される意味での（ネオ）リベラリズムの概念の提唱者，ブリンクマンは法律家，ゲッシュは法律家のちに建築家となる。カイザーは生理学者，ヘッセンベルク，クーラントはいずれも数学者，またオットーは『聖なるもの』で著名な宗教学者である。マイヤーホフは後にノーベル医学生理学賞を受賞した生理学者，クロンフェルトは精神医学者，ベルナイスは論理学者・数学者でネルゾン著作集の編集にも関わっている。

9)「続編」というのは，アペルトによる同名の先行雑誌と関係づけるためであるが，後者は1847，48年の2回発行されただけであった。「続編」第2巻発行の後，カール・カイザーは1908年に編集者を降り，1918年にネルゾンが関わった最後になる第4巻が発行された。ネルゾンの死後，オットー・マイヤーホフ，フランツ・オッペンハイマー，ミンナ・シュペヒトが1929年に第5巻を編集し，ネルゾンが生前の1922年に発表した序文が付けられている。

10) このときフッサールは，後の政治ジャーナリスト，テオドール・レッシング（Theodor Lessing,1872–1933）の発言を受けていたと言われる。レッシングは当時，ゲッチンゲンでハビリタチオンを試み，一緒に失敗した人物である（Hoffmann 1997: 355）。

11) 1903年，ネルゾンはゲッチンゲンでの最初のセメスターで，当時まだ員外教授だったフッサールとともに，あるセミナーで討論を行った際に，「専門哲学への友愛において，私には結局のところ才能がないように思える」と述べている（Vorholt 1998: 26–27）。

12）いささか大学教授会におけるポストをめぐる暗闘の様相を呈するが，伝記作者はそれぞれ力を入れてこの問題を描いている。それだけ，ネルゾンの活動にとって重大な問題であったと評価しているのである。Franke（1991）はかなりの紙幅を割いて，詳細に叙述している。Heydorn（1992）は，ネルゾンが教授会や大学当局から不利な扱いを受けた点を暗示する。それに対してD. Hoffmann（1997）は，ゲッチンゲン大学の教授会記録などにもとづき，手続きの上ではハイドルンの批判は当たらないとしている。

13）世界共通の大学入学資格を含む国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）に基づく国際教育組織，ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）の最初の一校であるアトランティック・カレッジの創設に寄与した。

14）ただし，戦争中の出版検閲のために，公開されたのはようやく1918年11月になってからだった。

15）ネルゾンはグレーリングとともに論理学の基礎づけ問題に取り組み，1908年に「ラッセルのパラドックス」に類似した「グレーリング―ネルゾンのパラドックス」を発見した。グレーリングは論理実証主義者のベルリン・サークルのメンバーであるが，1911−1922年にはSPDと深い関係を持ち，評論活動も行っていた。

16）ネルゾンは第3巻を『法哲学と政治学の体系』（Nelson1924）を1924年に自力で準備した。第2巻はグレーテ・ヘルマンとミンナ・シュペヒトによって講義原稿をもとに『哲学的倫理学と教育学の体系』（Nelson, 1932）というタイトルで，ネルゾンの死から5年後の1932年に上梓された。

17）シュネーデルバッハは次のように指摘する。「とりわけドイツで大きな影響をもたらしたのは，現代的な意味での社会学と心理学の成立であった。…さらに，自然科学的な方法をとる心理学の成立は…，それによって「内面へ」というディルタイ的な理解の方法が，それだけではもはや人間の精神の十分な自己理解には達し得ないことが明らかになったからである。…論理学と数学の領域における基礎づけをめぐる論争もここに起源を持つ。反省科学としての心理学は，本質的には哲学と変わらなかった。厳密な経験科学としての「新たな」心理学は，論理学における「心理学主義」というよく知られた循環問題に突き当たったのである。これを分析し，別様な基礎づけの試みに道を開いたのがフッサールとフレーゲであった。」（Schnädelbach 1983=2009: 104−105）

18）シュリックは物理学を学んだ後，哲学に転向した学者であり，論理実証主義とヴィーン学団の創立者として知られる。ネルゾンと哲学研究の方向性がきわめて類似している点は興味深い。

19）1916年にヘルマン・リーツ宛にこう書いている。「私がなんらかの希望をかけることができるような人間はもういませんし，本当の共同作業を期待できる僅かな人もいなくなってしまうか，あるいは［…］生命の危機に曝されています。」自分の経験はアカデミックな青年だけに向けられて居るが，彼らは将来において責めを負うことになるかもしれない。「しかしこの青年たちを私はまったく見損ないました，［…］彼らには何よりも性格・誠実・自律性・無私無欲という点で欠陥があるのです。」（cf. Vorholt 1998, 38）

20）国民協会の活動はそれ以上続かず，1916年夏にオールが戦死した。オールはその政治教育思想によってフリードリッヒ・ナウマンに影響を与えた。1918年にベルリンに公民学校が設立されたが，ナウマンの死後，ドイツ政治大学を名乗った。この教育機関の構想をナウマンは「援助」1918年2月の記事で取り上げた。

21）ルースはフランクフルト出身で，1890年以来，英国のパスポートを所持し，1920年からスイスに居住したが，ネルゾンの長年の友人であるゲルハルト・ヘッセンベルクの縁者だった。

22）PPAは今日まで存続するネルゾンの唯一の組織である。1933年にナチス・ドイツによって廃止された後，1949年に「登録団体」（“e.V.”）として再建された（cf. 太田 2014）。

23）PPA友の会から300,000ライヒスマルクの援助があった（cf. Ziechmann 1970: 105, Nielsen 1985: 18）。

24）ヴンダーは補償金として5000マルクを受け取った。

25）メルズンゲン郡長はネルゾンの政治的意見があまりにも過激であったとし，シュペヒトはヴンダーがネルゾンの指導原理を理解できなかった点に仲違いの理由を求めている。

26)「革命の後でプロイセン文部大臣の諮問があった。財政状態の悪化にかかわらず，教育制度改革を実現するためには何をすればいいのかというのだ。こう提案した。(国民学校から大学まで) 全国の学校全部を閉鎖しましょうと。この単純な措置に大臣は，新たな支出が国庫負担になるにもかかわらず，逆に学校制度改革のために巨大な財政措置を行い，同時に精神生活を飛躍させて，歴史に不朽の名を残すことになった」(Nelson 1971;578)。 Heydorn (1992: 23) に言わせれば，これは「皮肉な結果ではない。ネルゾンは，教育システムはどうしようもないほど崩壊しており，完全な新生が必要だと考えていたことが重要である。教育の新生をネルゾンはヴァルケミューレに託したのである」。

27) ヴァルケミューレでの教育については別に考察を要する。渡邊隆信 (2014:71) は田園教育舎系自由学校のナチス体制期における変化を，存続，改組存続，存続が認められずに閉鎖と大きく3つに区分する。ヴァルケミューレは1933年に閉鎖された (Ziechmann1970:151)。学校関係者の一部がベルリンに移り，雑誌『火花』(Der Funke) を発刊し，抵抗運動を開始したミンナ・シュペヒトは，一部の生徒と親，二人の教師とともに，デンマークへ，さらに1938年にはイングランドへ移住し，学校計画の存続を図る。多くの子どもの親はドイツに残ってナチスへの抵抗運動に関わり，あるいはフランスやイングランドへ亡命した (Nielsen1985:45ff., 126)。

28) フォアフォルトは，今日に至るまで，たとえばミンナ・シュペヒトに対するネルゾンの関係は，対応する文献では，まるで労働・家庭共同体として書き換えられたかのように，曖昧であると指摘する (Vorholt 1998: 46)。

29) K. R. Popper (1979) 第5章「カントとフリース」はフリースとネルゾンの研究である。

30) 両者には，カントと功利主義を結びつけようとする点など，多くの共通性が見いだせる。しかし，ネルゾンが倫理的判断プロセスの心理学的分析を企てたのに対して，ヘアが道徳言語の論理的分析を思考した点が両者を分けている。

31) ネルゾン哲学の評価にとっては極めて重要な点であるから，多くの研究がある。おそらく最も詳しいのはJ. Schroth (1994) であろう。この時期の心理主義に対する論理主義からの批判については，シュネーデルバッハは，すでに多くが書かれているとして触れていない。

32) 遡及的方法 (die regressive Methode)，真の利害の理論 (Theorie der wahren Intersse)，価値客観主義 (Wertobjektivismus) の三点について，その不十分さを指摘している。H. Groneke (1998) もほぼ同様の3つの外在的理由と6つの内在的理由をあげている。

33) ビルンバッハーは，カント的原理と功利主義的原理の結合だけではなく，ネルゾンの「動物倫理」(Tierethik) を詳しく紹介している (Birnbacher 1998: 19ff.)。ちなみに，ネルゾンの動物倫理に関する言及はパスモア (1979:194–198) にある。

参考文献

Birnbacher, D., 1998, “Nelsons Philosophie — Eine Evaluation,” D. Krohn, B. Neisser, & N. Walter eds., *Zwischen Kant und Hare. Eine Evaluation der Ethik Leonard Nelsons*, Dipa-Verlag, 13–36.

Franke, H., 1991, *Leonard Nelson Ein biographischer Beitrag unter besonderer Berücksichtigung seiner rechts- und staatsphilosophischen Arbeiten*, Ammersbek Verlag an der Lottbek Jensen.

Gronke, H., 1998, “Nelsons Vernunftethik. Ihr Stellenswert in der moralphilosophischen Duskussion der Gegenwart,” D. Krohn, B. Neisser, & N. Walter eds., *Zwischen Kant und Hare. Eine Evaluation der Ethik Leonard Nelsons*, dipa-Verlag, 13–36.

Henry-Hermann, G., 1985, *Die Überwindung des Zufalls: Kritische Betrachtungen zu Leonard Nelsons Begründung der Ethik als Wissenschaft*, Felix Meiner.

Heydorn, H.-J., 1992, “Einführung,” H.-J. Heydorn ed., *Leonald Nelson. Ausgewählte Schriften*, Europ

Vlg., 7–40.
Hoffmann, D., 1997, “Leonard Nelson und die Philosophische Pädagogik,” J. Oelkers, W. K. Schulz, & H.-E. Tenorth eds., *Neukantianismus: Kulturtheorie, Pädagogik und Philosophie*, Westdeuscher Verlag, 351–86.
Nelson, L., 1908, “Was ist Liberal?,” GS, Bd. 9, 1–26.
————, 1910, “Die philosophischen Grundlagen des Liberalismus,” *GS,* Bd. 9, 30.
————, 1911, “Die Unmöglichkeit der Erkentnisstheorie,” *GS.* Bd. 2, 459–83.
————, 1914, “Vom Staatsbund,” *GS.* Bd. 9, 43–57.
————, 1917a, “Reformation der Gesinnung durch Erzhieung zum Selbstvertaruen,” GS, Bd. 7, 241–5.
————, 1917b, “Wilhelm Ohr als politische Erzieher,” GS. *Bd. 8* 417–47.
————, 1971, *Sittlichkeit und Bildung*, (Gesammelte Schriften in neun Bänden, Band VIII), Felix Meiner Verlag.
————, 1972, *Recht und Staat*, (Gesammelte Schriften in neun Bänden, Band IX), Felix Meiner Verlag.
————, 1973, *Geschichte und Kritik der Erkenntnistheorie*, (Gesammelte Schriften in neun Bänden, Band II), Felix Meiner Verlag.
————, 1975, *Vom Selbstvertaruen der Vernunft. Schriften zur kritische Philosophie und ihrer Ethik*, Hamburg: Felix Meiner. (Herausgegeben von Grete Henry-Hermann).
————, 1917, *Kritik der praktischen Vernunft. Vorlesung über die Grundlagen der Ethik, 1. Band,* GS. Bd. 4.
————, 1924, *System der philosophischen Rechtlehre und Politik. Vorlesung über die Grundlagen der Ethik, 3. Band,* GS. Bd. 5.
————, 1932, *System der philosophischen Ethik und Pädagogik. Vorlesung über die Grundlagen der Ethik, 2. Band,* GS. Bd. 6.
Nielsen, B. S., 1985, *Erziehung zum Selbstvertrauen. Ein sozialistischer Schulversuch im dänischen Exil 1933–1938*, Peter Hammer Verlag.
太田明，2012,「ソクラテス的対話において「聞く」こと」『論叢』52: 3–16.
————，2014,「ソクラテス的対話の実際とその方向性—7th Intrnational Conference: Philosophizing through Dialogueに参加して—」『論叢』54: 115–35.
パスモア J., 1979,『自然に対する人間の責任』岩波書店.（間瀬啓 充訳.）
Popper, K. R., 1979, *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie*, Mohr.
Schnädelbach, H., 1983, *Philosophie in Deutschland 1831–1933*, Suhrkamp（= 2009，朴順南・舟山俊明・内藤貴・渡邊福太郎訳『ドイツ哲学史1831–1933』法政大学出版局.）
Schroth, J., 1994, “Regressive Methode der Abstraction und mittelbare Erkenntnis,” R. Kleinknecht & B. Neisser eds., *Leonard Nelson in der Diskussion*, Dipa-Verlag, 1. aufl. edition 147–60.
UNESCO ed., 2007, *Philosophy. A School for Freedom: Teaching philosophy and learning to philosophize: Status and Prospects*, UNESCO Publishing.
Vorholt, U., 1998, *Die politische Theorie Leonard Nelsons: Eine Fallstudie zum Verhältnis von philosophisch-politischer Theorie und konkret-politischer Praxis*, Nomos1. edition.
渡邊隆信，2014,「「アジール」としての新学校の村立条件—オーデンヴァルト校1930–1934—」『新教育運動期における学校の『アジール』をめぐる教師技法に関する比較史的研究』69–78 平成23–25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））成果報告書（課題番号：23531005）研究代表者山名淳.
山名淳，2000,『ドイツ田園教育舎研究-「田園」型寄宿制学校秩序形成』風間書房.
Ziechmann, J., 1970, *Theorie und Praxis der Erziehung bei Leonard Nelson und seinem Bund*, Klinkhardt.

（おおた　あきら）

Leonard Nelson on〈Self-reliance of Reason〉(1): A brief biography of Leonard Nelson

Akira OTA

Abstract

The purpose of this paper is to describe a brief biography of a German philosopher Leonard Nelson (1882–1927), who worked mainly in Gottingen University in Germany in the first half of the 20th century.

Nelson is now remained only in memory as advocate of "Socratic Dialogue". His activity was not only that, but had a wide variety. He encountered in and was fascinated by philosophy of Jakob Friedrich Fries (1773–1843), a neo-Kantian Philosopher almost consigned to oblivion at that time, and in accordance with whom he developed his own philosophy – epistemology, ethics and philosophy of law –. Nelson engaged himself energetically in political activities, basically in left-liberal position but based on his own ethical principles. In addition, Nelson, influenced by New Education Movement in Germany and seeking for realization of his own political thought, run a Landerziehungshem.

Almost all of his activities, however, are nearly unknown today. Of course, there are intrinsic or extrinsic reasons to it. In this paper I trace Nelson's life based on the existing biographical materials, and explore the extrinsic reasons for forgetting.

Keywords: Leonard Nelson, self-reliance of reason, socratic-dialogue